

Title	老の思ひ出(吉井良秀著)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.2 (1928. 7) ,p.152(306)- 154(308)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19280700-0153">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19280700-0153</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 老の思ひ出 (吉井良秀著)

關西の名社西宮神社に五十四年の長年月奉仕し、今は只だ花鳥風月を樂しみ、筆硯を友として靜に老後を養はれつゝある吉井良秀翁が、數年前奉仕の餘暇に往時を追想しつゝ書き留められた「老の思ひ出」を、今次、令嗣太郎氏の手校のもとに上梓頒布せられ筆者も亦一部を惠贈に預つた。本書は一名『西宮昔噺』と題し、一讀、興味津々たるものがある。因つて本書内容の一部を紹介して翁の筆勞に報い度いと思ふ。

西宮の起源に就いての事——西宮は對岸津門村の漁民の漁業場より發達し、其處を指して西村とか西の濱とか呼稱し、こゝに日本人の先天的習慣で祠を創建し、是が地名の西に因んで大國主西神社と稱し、略して西宮とも云ひ、後、この神社の信仰が盛んとなつて、終に土地の名迄西宮と呼ぶに至り、母村の津門より却つて繁昌するに至つたのである。右の神社の名は延喜式神名帳に記載せられ、西宮の名は大治西宮歌合等に見えて居れば、同地は餘程以前より開發して居つた事が推察せられる。

産所及名次の事——産所の地名は、こゝに限らず諸國に在る如く、神社等の淨地を避けて産期に臨んで移住した處と傳へるが、西宮の産所は後に、世の落伍者と云れた傀儡師の居所となり、徳川時代に線の芝居小屋があつて領主の姫君が見物した記録も存し、この傀儡師の中には夷神畫像札を賣る者などもあつて、これ等の輩の諸國出稼は、夷神の神徳宣傳に功績が少くない。この傀儡師と西宮とは特殊の因縁があり、これ等に就いては吉井太郎氏

の研究書がある。

西宮神社往古の建物に付ての事——古寫の四書を對照して建物を説明せられ、又諸書に現はれて時代の明なる西宮の事項——慶長以前の諸書中、西宮に關する記事を摘録したもので參考となる處がある。

明治初年廣田神社と西宮との關係——明治七年六月に縣社大國主西神社と改稱せられた處、廣田神社千野少宮司が教部省に是れより先、大國西神社は、廣田の境内社なる大國主社で、西宮夷神社(縣社昇格の大國主西神社)は廣田の攝社なりと建言した爲に、九月縣社取消と同時に廣田神社攝社たるの違があつた。こゝに於て氏子等大いに辯駁奔走の結果翌年四月指令あつて、明治初年改正の大國主西神社の名稱は廣田の境内末社大國主社の名稱となりて式内社の名を存し、姪兒神社、即ち本社は西宮神社と稱し其縣社と成つて無事解決した。

平安末期に御巫が置かれて有つた事——西宮は廣田と共に、古から巫女が置れ、建久の頃に巫女壽王と云ふものが居て社中の上位に置かれ、貞應三年の神祇伯の社參の節には、巫女の四條女宅を宿所としたことより察して其宅は相應に宏壯な物らしく、又當時多數專屬のものが居り、猶ほ當時現即ち、男の巫も居つたらしい。又維新常時には男の巫子二人が表門前に宿屋を兼業して、講中や氏子の講で、神樂所て鈴の行事を行ひ、社役人と同様下級な社人と成つて苗字帯刀も許されて居つた。

維新前西國街道殷賑の事——維新前に於ける西國大小名の參觀交代や元治元年五月の香權宇佐兩宮の奉幣使、宿屋盛衰、大阪通

ひの早船等に關して記述せられたものである。元治元年十一月長州征伐に際して總督尾張侯の兵が前後數日間、毎日通行したのは前代未聞で、引續いて定藩等が通行するなど、街道筋は實に忙殺せられ、これが爲に西宮は經濟上容易ならざる苦境に陥つた。

海陸の警備の事——嘉永五年太平の夢を破ぶられて以來、西宮の警備は各藩交代で嚴重にし、元治元年蛤御門の敗戦に因りて落人となつた長州兵の一部はこゝを通過したが、其の休息の茶店や商人等は後に幕府から痛く糾問せられ、ヒドイメに逢ふた。又文久三年八月十八日に、長州落の七卿が宿泊して此夜同卿は何れも鐵漿を割し、風装を變ぜんとて古羽織や脚絆杯を求めた。慶應二年高松藩が警備し、初めは日々海岸に於て太鼓や横笛の囃入りで佛蘭西式の訓練を行つて、小兒等を面白がらせたが滯留年餘に至るに及んでからは、兵士等は銃劍持つ手に三味線を抱へ、或は謠曲を稽古して稍懈怠の状を現し始めた。猶海岸の砲臺は勝安房の指圖で文久三年より慶應二年に及んで出來し、(今の西波止の住吉祠の小高いのは泥臺場と云つたもの)この土運入足の料金は至つて『被格だお臺場の土運び云々』の俗謡も生れ、一時は砲二三門を据ゑて試發を行つた處、煙が内に充満して逆も實戦には役立つまいと當時豪い評判であつた。

新酒番船の事——毎年春二三月の交に、灘五郷や池田、伊丹、大坂杯の新酒を初めて江戸に回漕するに當り、數艘の千石船(樽船)は申合せて一時に西宮港を出船して各品川先着を競争し、其の第一番着到船の酒は高價に昇り、其船主は其年中、港にて積落の優劣を與へられるので、其の船主船頭の猷身的競争たる出船式は

當時に於ける一つの偉觀であつた。

慶應末年と明治にかけて見聞せる事ども——慶應三年國內が鼎の沸騰するが如き騷狀中に、神の御札や小判や銀札の『お降り』の奇妙な一件が全國廣い範圍に起つたが、西宮もこの例に漏れず降つた家はこれを祭つて、商賣まで休んで盛んに市中を踊り廻り、翁の家にも明治元年三月末に伊勢の劍先が降り、例の如く祭つたが、この頃は世人には珍らしがられなかつた。又元年鳥羽伏見の戦以來、人々は危惧に堪へられず、金銀を家族の肌身に付けるとか、書類家財を地中に埋めるとか皆々逃仕度に餘念がなく、五月には兵庫裁判所が兵庫縣と改まつて知事に伊藤俊助(博文)が赴任し、折々、大きい鬻を頂いて大小を横たへ、陣笠にブツサキ羽織の馬上姿を現らはした。それから太政官日誌、カラス計の寫眞、郵便、電信、ブラック新聞(東京日日の前身)と新進のものが人々の耳目に觸れて來、六七年には舊藩士の家祿奉還があり、其の代償公債を資本にして商賣をすれば、士族の商法として瞬間に公債は勿論家財を皆無にして仕舞ふ慘狀を目撃した。又五年には十一月三日を期して、太陽曆を使用し、方年に斬髪が流行し『チョン鬚頭を叩いて見れば、因循姑息の音がする』と嬉しがりが囃した。

以上は本書の極一小部分で、殊に維新前後の追憶は實に興味深く、今、翁が昭和維新より明治維新を追想せらるるならば實に感慨無量なものであるであらう。

猶ほ、本書には附録として西宮關係の詩歌等を廣く蒐集して併載し、又圖版十數も挿入せられ居る。

最後に、筆者は翁に滿腔の敬意を表し且つ健康を祈る次第であ

る。(三、三、一、夜、武田勝藏)

### 中世職人史

(ピエール・ブリゾン原著  
白井勝喜代譯 刀江書院發行)

從來の歐洲經濟史に關する邦人の文献は、多くは一般的な概説であつて、微に入り細に亘つて論述したものが極めて少ないやうである。故に今後邦人の歐洲經濟史研究は一步を進めて、根本的なる個々の史實の探究に向ふべきであつて、斯くて邦人の歐洲經濟史研究は一層高い價値を有することとなるであらふ。茲に於てか最近 Pierre Brizon; *Histoire du Travail et des Travailleurs* の前半が「中世職人史」と銘打つて譯出されたことは洵に意義深いことである。

本書は中世より佛蘭西革命に及ぶ手工業時代に於ける工業労働者及び農民の生活について詳細に論述したものであつて、極めて興味ある豊富な材料を紹介しつゝ、それが綜合に妙を得たるものである。先づ初めに同業組合につきて述べ、近世に於けるブルジョアツの元祖が中世の同業組合なることを説き、又大工業の起原に就いては、近世の大工業は佛蘭西革命以後を主とするも、實は大工業の起原は革命以前に存せることを明らかにし、更に同盟罷工は近世的産物に非ず、既に中世に於て近世のそれと類似せる同盟罷工の行はれしことを述べ、幾多往時の實例を擧げてゐる。又「泣く土地」と題して中世農民の哀れむべき生活状態を述べ、「生れる土地」と題しては農民が漸次中世の拘束から脱して生活の光明を見出すに至りし状態を述べてゐる。此の外處々に於いて勞働

法制に論じ及ぼしてゐることも見逃し難いところである。然し要するに本書の特色は、中世の凡ゆる種類の工業労働者の生活を詳細に寫し、其の状態を讀者の眼前に髣髴せしめる點にある。而して挿入された多くの圖版は一層此の書の價値を多からしむるものである。

譯者白井氏は法制史研究のため外遊され最近歸朝した人であつて、譯文の流暢にして平易明快なる、巧みに俗語俚言を使驅し、つとめて中世的雰圍氣を再現せしむるに苦心せるは敬服すべきである。敢て萬人に薦むるに躊躇しない。(有賀春夫)

### Josef Bayer, *Der Mensch im Eiszeitalter*

I. II. Leipzig u. Wien 1927.

豫てから、バイヤー氏の近著が出版せらるゝことを聞いて居つたが、此程漸く入手することが出来た。氏はウキーンに於ける自然史博物館に於ける史前學人類學部長で、燠國に於ける舊石器時代研究の權威である。それが豫てよりの研究を取纏められたもので、財政逼迫の燠國として、出版も遅れ、第一第二編のみを一冊として、今回出版せられたのも、こんな所に理由があるのではないかと、想像をして居る。

本書は其名の如く「氷河時代の人類」の研究であり、これを史前學上から云へば、舊石器時代の研究なのである。其第一編は *Der Weg zur Relativen Chronologie des Eiszeitalters*、即ち「氷河時代の相對編年への道程」であつて、これを四章に分ち、この時代